

一部に緑の少年隊が役に立つことができれば、ますます輝くまちづくりができる。

に開放たれている。

(飯能緑の少年隊事務局長)

輝く人、輝くまち、輝く地球、……ドアは一直線

ともかく揺れるブランコ

鍋島 恵美

幼稚園という生活のなかに子どもたちがやってきた時、その新鮮さに、ワクワク・キラキラ心を踊らせ目を輝かせる子どもと共に、ドキドキ・オロオロ

目を伏せる子どもの姿も感じます。『支え合う』とは、どんなことなのか幼児とともにある生活から問い直してみようと思います。



おかあさんとともに揺れる

一九九七年の春、私は四歳児を受け持ちました。

その中にいるA夫は、三歳児の生活を他園で過ごしました。「先生、今まで迎えるのバスに乗ってでかけていたのに、今になってどうしてでしょうか」と、A夫の母は、幼稚園に来てぐずるわが子の心を察しかねて困っています。私は「新しい環境にAちゃんの心が、グラグラ揺らいでいるのと違うでしょうか。その心が落ち着くまで、焦らずにいきましょう。

一緒に傍で遊んで下さっていいですよ」と、伝えました。A夫には、今は保育者でなくおかあさんが必要なのです。このことをA夫の母に、納得してもらうことは難しく感じました。元気に遊ぶ子や保育者に親しむ子の姿を見ながらわが子と遊ぶおかあさんの心は、早くわが子も……と揺らいでいたに違いありません。おかあさんの目が、羨むように他の子どもに向けられている時、「おかあさん、Aちゃんと

一緒にこっちへ来て遊びませんか？」と母子の心が外に向くように誘ってみました。おかあさんも「はい」と、素直に応じて下さいました。

秋の頃、母と保育室の前まで来て、そこで別れるようになりました。幼稚園の環境に慣れ、保育者も頼れる人として思えるようになったのでしよう。毎日の送り迎えや育友会（父母の会）の行事を通して、おかあさんにも仲良しの人が出来たようでした。

私と揺れる　　～Aちゃんいるよ～

A夫は、自分の持ち物を始末するのに、ずいぶん時間がかかります。彼にとつて、身辺の自立が心の自律につながると思います。ゆっくり待ちました。声や表情に出すことの少ない彼が、何に心を動かすのか、そつと見守りました。周りの子どもが、ハイテンポに行動する中で、みんなの中にA夫の存在が消えないよう、特別視されないようにA夫にかけるこ

とばや行動に気を配りました。彼は、描いたり作ったりすることが好きで細かいことにじつくりと打ち込んでいます。好きなことをつぎつぎと見付けては、楽しむ子どもの多いなかで、彼の存在が貴重に思えました。S夫・Y子から、神輿作りが始まり、A夫に「お祭りの飴作って、お店しようか？」と誘い、一緒に作って店を出しました。今度は、私も神輿衆になり傍にいる子どもに、「Aちゃんの飴、おいしそう。買いにいこう」と、声をかけやりとりの生まれるきっかけをつくりました。元気のいい神輿衆の子どもは、「飴ください」と。その勢いに押されがちのA夫ですが、きちんと一人ずつに手渡しています。そのようなことから、A夫の心が開かれていて、これから色々なことを吸収していく力があることがわかりました。

虫探しの探険が始まりだした頃、「A君」と、S夫からの呼び掛けを耳にするようになりました。私もS夫の声を耳にした時は、「Aちゃん、Sちゃん

が探していたよ」とA夫に、S夫には「Aちゃんいるよ」と、双方の「心の糸」をつなぎながら、彼らの関係を育みたいと考えました。S夫とは、母親同士が仲良しのことも、きっかけになったようです。虫好きで、虫のことをよく知っていることが、虫探険に集まる子どもたちに、A夫の存在感をクローズアップしていきました。

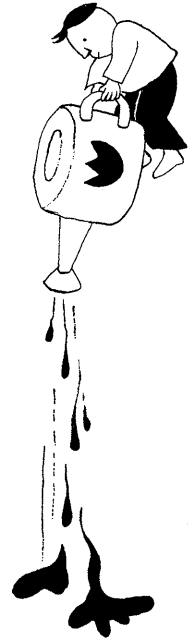
友と揺れる

一九九八年の春、五歳児の保育室は二階。A夫も母と別れて保育室へ来ています。

A夫は、プール遊びは苦手です。「おいで」と、声かけてもイヤイヤと首をふります。それに気付いて、S夫が「A君おいで……そつとここからおいで大丈夫やで」と、手をさしのべると、A夫がそのようにプールへ入ります。目を洗う時も、「Aくん、ここで洗い」と、水量の加減もしてやります。彼らの間に育まれている絆を大切に思う反面、S夫の優

しさと、それに支えられるA夫の関係が、おかあさんと子どものもので、「彼らの関係は対等なのかなあ……」と、A夫の自律を思い考えさせられる頃でした。

秋の頃、「昔（昨年のこと）したなあ」と、神輿や店作りが始まりました。A夫は、鯛焼き屋を始めました。U子やT子が「寄せて（入れて）」とききました。カマキリの赤ちゃんの誕生から、カマキリ探険をT子・B夫とともに始めました。この頃になると、A夫の関心事に他児が仲間入りして、その子どもたちとともに行動し始めました。A夫の心が能動的に動き出しました。保育室で始まったK夫との遊



びがきっかけになり、みんなで虫ごっこが始まりました。私も積極的にその中で遊びました。園庭のイチョウの落葉の中に、A夫は、鉄棒を運びゴザを掛け、スズメバチの家作りを毎日繰り返しました。彼の周りにカブトムシやカマキリなどの家も建ち虫の住む村のようでした。その中で、A夫が初めて喧嘩をしました。家作りでT夫と互角に争っています。「いいぞ……頑張れ」と、私は心の中で応援しました。とうとうA夫が、声をあげて泣きだしました。相手に自分を思い切りぶつけています。しばらくして、T夫と仲直り。彼らで妥協案を見つけました。またある時は、「スズメバチさん、大変！ カブト

ムシさんが戦っています」と、その仲裁を頼むと、両手を羽のように動かし素早く飛んでいき威嚇します。その行動は、普段と違い機敏です。好きなものになりきって遊ぶことが、彼に勇気と力を与えるのだと感じました。A夫は自分の生活に充実感を持ち始めていました。一方、S夫は仲間のなかで自分の思いが通じず淋しさを感じていました。S夫から「何してるの？ あそぼ」と、A夫に声をかけることが増えてきました。A夫は「いいよ」と寄せてやります。S夫は、A夫と遊ぶと元気になるのか、また元の仲間のところへ行ったりしました。A夫とS夫との関係が変化し始めバランスがよくなっていくようでした。A夫は、仲間の中でしっかりと自分を確立し自信をもち始めていきました。

ともに揺れる

自分の好きなことをゆったりとしたテンポで十分に楽しむA夫。そこにかかわる子どものトキは、カ

チコチと足早。しっかりと地に立つには、自分の心が納得できるまでじっくりと時間があるのではないかな……。周囲の足早に過ごしていく子どもも、いつかそのトキが必要になるのかもしれないと、A夫との出会いのなかで再考しています。A夫は、初めはおかあさんに、そして、保育者に好きな友達にと信頼を寄せる人の輪を広げ、支えてもらいながら心を安定させました。今では、S夫もA夫がいることで支えられ、実は私も保育する心を支えられているように思います。支え合うということは、自分が自分なりに立っていて、立っている人同士がともに揺れることではないのか……。A夫の心とともに母が、私友が揺れていたように……。それは、ともに揺れるブランコのようなしなやかな力のように思えるのです。

（京都教育大学教育学部附属幼稚園）